

令和 6 年度全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目 次

1 はじめに

2 調査の概要

- (1) 調査の目的
- (2) 調査の方式
- (3) 調査の実施日および調査の対象
- (4) 調査の内容
- (5) 調査結果の見方
- (6) 本市の基本的な考え

3 教科に関する調査結果

- (1) 令和 6 年度 各教科の平均正答率一覧
- (2) 教科に関する調査について【小学校】
 - ①直近 4 回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③算数について
- (3) 教科に関する調査について【中学校】
 - ①直近 4 回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③数学について

4 質問紙に関する調査結果

- (1) 教育活動の取組状況に関わる項目について
- (2) 教育環境に関わる項目について

1 はじめに

令和6年4月に実施された「令和6年度 全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携をし、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況から学習指導の改善に努めていきます。

また、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要があります。したがって、本内容を活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	・令和3年度	国語、算数・数学
	・令和4年度	国語、算数・数学、理科
	・令和5年度	国語、算数・数学、英語（中学校のみ）
	・令和6年度	国語、算数・数学

(3) 調査の実施日および調査の対象

令和6年4月18日（木）

- ・小学校第6学年（市内25校、1,361名）
- ・中学校第3学年（市内11校、1,307名）

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・小学校・・・国語、算数
- ・中学校・・・国語、数学

② 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

* 質問紙調査はオンラインによる回答方式で実施

(5) 本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、「令和6年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」に基づき、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、**児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料**である。

3 教科に関する調査結果

(1) 令和6年度 各教科の平均正答率一覧（単位は%）

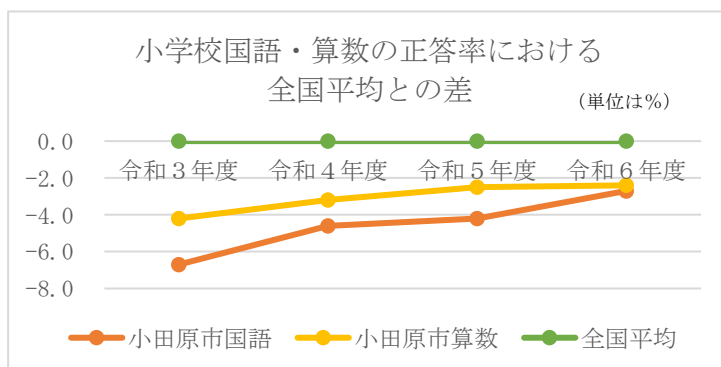
	教科	小田原市	神奈川県	全国
小学校	国語	65	67	67.7
	算数	61	64	63.4
中学校	国語	57	59	58.1
	数学	52	54	52.5

※市や県の正答率は整数表示

小田原市の平均正答率は、全教科で「全国平均正答率±10%」の範囲内に含まれており、**全国との大きな差は見られない。**

(2) 小学校の調査結果

直近4回の平均正答率の経年変化



小学校調査では、各教科で**全国平均との差が縮まったことに加え、平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

①国語について

言葉についての知識及び技能を問う設問では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」で令和5年度より全国平均との差が多少開いたが、「情報の扱い方に関する事項」で全国平均を上回る結果になった。

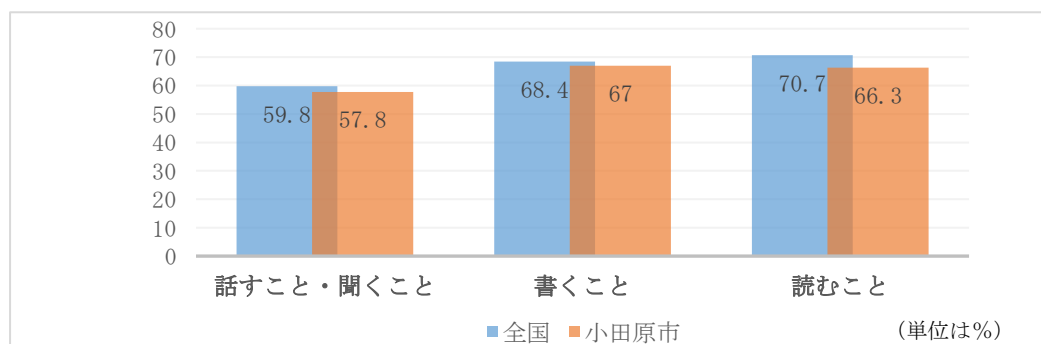
＜小学校国語「知識及び技能に関する事項」における全国平均正答率との差＞（単位は％）

知識・技能	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
言葉の特徴や使い方に関する事項	-8.3	-6.8	-3.8	-4.9
情報の扱い方に関する事項	—	—	-0.7	+1.7
我が国の言語文化に関する事項	—	-8.7	—	-2.3

※R5年度まで言語に関して2つの内容事項について調査

今回の調査で特に全国平均正答率と差が大きかったのは、学習指導要領の内容の「思考力、判断力、表現力等」の項目のうち、「読むこと」の区分である。

＜小学校国語「思考力、判断力、表現力等に関する事項」における平均正答率＞



「読むこと」の問題では、3つ目の「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる」問題の正答率が全国平均正答率と比べて差が大きい。

＜小学校国語「読むこと」の問題と正答率＞（単位は％）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	「オニグモじいさん」が「ハエの女の子」にどのように話すか迷っていると考えられるところとして、適切なものを選択する	登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる	65.0	-1.9
2	【話し合いの様子】で原さんが【物語】の何に着目したのかについて説明したものとして、適切なものを選択する	人物像を具体的に想像できるかどうかをみる	69.1	-3.4
3	【物語】を読んで、心に残ったところとその理由をまとめて書く	人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる	64.7	-7.9

【まとめ】

児童質問紙では、「国語の授業で、物語を読むときに、登場人物の性格や特徴、物語全体を具体的にイメージし、どのような表現で描かれているのかに着目しています」の質問に対し、「あてはまる」と回答した児童は38%と低くなっている。国語の学習においては、**児童それぞれの読み方ができるように配慮し、心に残ったところとその理由を交流することにより、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりすることが大切である。**それらを書くことが難しい場合には、**場面ごとの登場人物の行動や会話の変化を一緒に読んだり根拠を表す語句を例示したりする**など、「言葉の特徴や使い方に関する事項」と関連させて、自分の考えを適切に書いて表現できるように指導するとよい。

②算数について

各領域で全国平均正答率より若干下回っているが、令和4年度に大きく下回っていた「図形」の領域では、全国平均との差を昨年度程度に維持している。

＜小学校算数領域別の全国平均正答率との差＞（単位は％）

領 域	令和4年度	令和5年度	令和6年度
数と計算	-3.2	-3.9	-3.5
図形	-5.1	-2.5	-2.8
変化と関係	-2.9	-2.2	-1.6
データの活用	-2.8	-3.1	-0.5

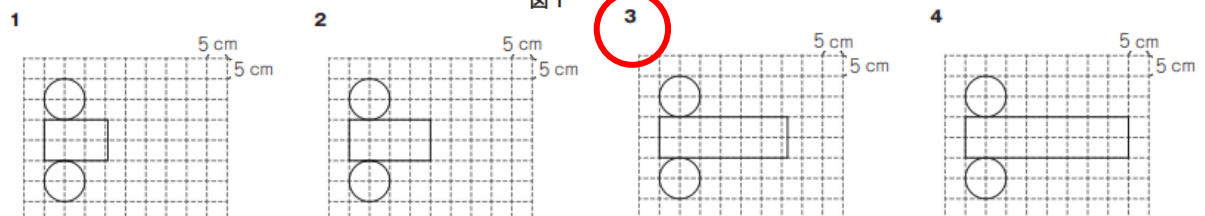
図形領域の問題において、特に全国平均正答率との差が大きかったのは次の問題である。

問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
円柱の展開図について、側面の長方形の横の長さが適切なものを選ぶ	直径の長さ、円周の長さ、円周率の関係について理解しているかどうかをみる	64.4	-6.9

図1の円柱の展開図はどれですか。



図1

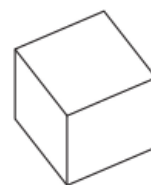
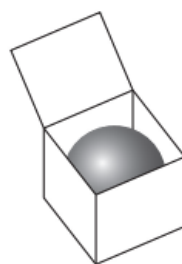


円周の長さは直径の長さに円周率をかけたものであることが、視覚的に理解できるようにすることが大切である。

図形の問題は、他の領域に比べ全国平均正答率も低い。特に全国的にも正答率が低かった問題は次のような問題である。小田原市でも約4割の正答率であった。また、無解答率も高い。

問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
直径 22 c m のボールがぴったり入る箱の体積を求める式をかく	球の直径の長さで立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができるかどうかをみる	37.1	+0.6

(3) 直径 22 cm の球の形をしたボールがあります。 このボールがぴったり入る立方体の形をした紙の箱の体積を調べます。



解答類型

- 1 $22 \times 22 \times 22$
- 2 22×22
- 3 22×3
- 4 3.14 を用いた式

この立方体の形をした紙の箱の体積が何 cm^3 を求める式を書きましょう。
ただし、紙の厚さは考えないものとします。また、計算の答えを書く必要はありません。

小田原市では正答の解答が一番多かったが、4 の円周率を用いた式を解答したものが2番目に多かった。図形を構成する要素を見出し、図形の体積を求めるのに必要な数値は何か考える必要がある。



また、4つの領域のうち、全国平均正答率との差が一番大きいのは「数と計算」の領域である。「数と計算」の問題別正答率を見ると、全国平均正答率との差が特に大きいのは次の問題である。

＜小学校算数「数と計算」の問題と正答率＞（単位は％）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	問題場面の数量の関係を捉え、持っている折り紙の枚数を求める式を選ぶ	問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができるかどうかをみる	56.2	-5.9
2	$540 \div 0.6$ を計算する	除数が小数である場合の除法の計算をすることができるかどうかをみる	64.3	-5.8

1の問題「ゆうさんは、折り紙を72枚持っています。ゆうさんが持っている折り紙はこはるさんが持っている折り紙より28枚少ないです。こはるさんが持っている折り紙を求める式を選びましょう。」は、第2学年の「加法や減法の問題場面の数量の関係を捉え、式に表す」に該当する内容である。この問題の解答類型をみると、問題文の「少ない」に着目しひき算を選択してしまった児童が多かったと考えられる。

2の問題は、第5学年の「小数の乗法及び除法の計算ができること」に該当する内容である。この問題の解答類型をみると、90と回答した児童が2割程度おり、 $540 \div 0.6$ の0.6のみを10倍して計算したことが原因ではないかと考えられる。

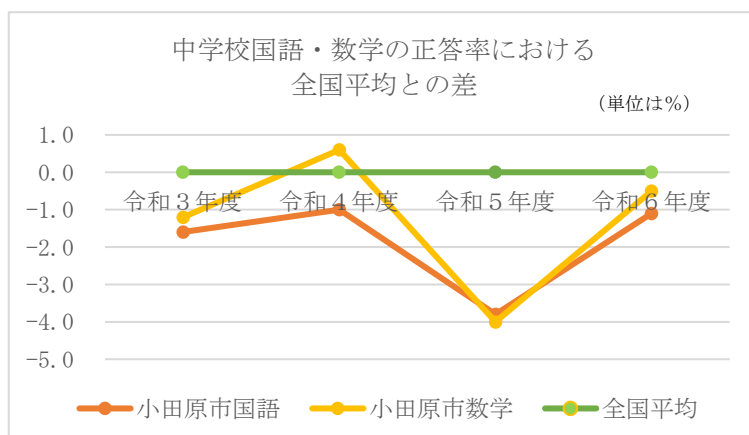
【まとめ】

算数の学習では、問題で分かっていることを図に表し、数や図をかき加えていくことで、問題場面の数量の関係を自ら捉えることができるようにすることが重要である。また、四則の計算では、計算法則を活用し、計算を工夫したり計算の確かめをしたりすることが重要である。一人ひとりの問題を解く速さや理解度に合わせ、その子にとって最適な問題をより多く解くことができるような指導方法の工夫も必要である。



(3) 中学校の調査結果

直近4回の平均正答率の経年変化



中学校調査では、各教科で**全国平均との差が縮まったことに加え、平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

①国語について

昨年度は中学校国語の区分別の全国平均正答率との差が、概ねどの区分も-3.5ポイント程度であった。特に思考力、判断力、表現力等の「B 書くこと」について全国平均との差は、前年度-3.4ポイントであったが、今年度は差がなかった。知識及び技能の「(3) 我が国の言語文化に関する事項」については昨年度課題として挙げていたが、-0.8ポイントと差が縮んでいる。

<中学校国語 区分別の全国平均正答率との差> (単位は%)

分類		区分	小田原市 正答率	全国 との差
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	56.3	-2.9
		(2) 情報の扱い方に関する事項	58.3	-1.3
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	74.8	-0.8
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	58.6	-0.2
		B 書くこと	65.3	0
		C 読むこと	45.4	-2.5

本年度、全国平均正答率との差が大きかったのは、知識及び技能の「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」である。

＜中学校国語「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項の問題と正答率」＞（単位は％）

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	物語を書くために集めた材料を取捨選択した意図を説明したものとして適切なものを選択する	目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる【書くこと】	82.4	+1.0
2	物語の下書きについて、文の中の語句の位置を直した意図を説明したものとして適切なものを選択する	文の成分の順序や照応について理解しているかどうかをみる	52.1	-1.7
3	漢字を書く（みちたりた）	文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる	61.6	-7.2
4	表現を工夫して物語の最後の場面を書き、工夫した表現の効果を説明する	表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる	48.3	-1.0

3の「漢字を書く」については、「満ち足りる」という言葉になじみがないなど文脈に即して「みちたりる」という言葉の意味を捉えることができなかつたり「満足」という言葉と結びつけることができなかつたりしたことがあったと考えられる。

4は正答率が5割を切っている問題である。これは記述で解答する問題であるが、無解答率も高い。調査全体を見ても、記述で解答する問題は正答率が低い。

【まとめ】

漢字の指導においては、**文脈に即して漢字を読んだり書いたりすることができるよう指導することが大切である。**また、文章の中だけでなく、「A 話すこと・聞くこと」の学習の中や他教科等の学習や日常の会話の中でも、**漢字の書きについて意識するよう**に指導することも大切である。自分の考えがよく伝わる文章を書くには、表現の効果を考えて描写するなど、工夫して書くことが必要である。そこで**自分が伝えたいことを明確にし、効果を考えながら工夫して記述したり、伝えたいことが読み手に伝わっているかを確かめて推敲したりすることができるよう**に指導することが重要である。

②数学について

「図形」の領域が、小学校同様正答率が低い結果であり、平均正答率が約4割程度であった。

＜中学校 数学領域別の全国平均正答率との差＞（単位は％）

領 域	小田原市	全国との差
数と式	50.6	-0.5
図形	38.5	-1.8
関数	58.9	-1.8
データの活用	55.6	+0.1

問題別にみると、正答率が低いのが図形問題の1問目と2問目である。1問目は筋道を立てて証明する思考力、判断力、表現力等を問う問題、2問目は平面図形の新たな性質を見いだす知識・技能の問題である。

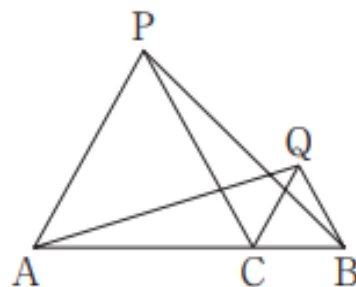
	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	点Cを線分AB上にとり、線分ABについて同じ側に正三角形PACとQCBをつくるとき、 $AQ = PB$ であることを、三角形の合同を基にして証明する	筋道を立てて考え、証明することができるかどうかをみる	23.5	-2.3
2	点Cを線分AB上にとり、線分ABについて同じ側に正三角形PACとQCBをつくるとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の大きさについていえることの説明として正しいものを選ぶ	事象を角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見いだすことができるかどうかをみる	26.0	-0.7

＜1の問題＞

$\triangle PAC$ と QCB は正三角形

（1）桃子さんは、コンピュータを使って調べたことから、点Cが線分AB上のどこにあっても、 $AQ = PB$ になると予想しました。

桃子さんの予想した $AQ = PB$ がいつでも成り立つことは、 $\triangle QAC \equiv \triangle BPC$ を示すことで証明できます。 $AQ = PB$ になることの証明を完成しなさい。



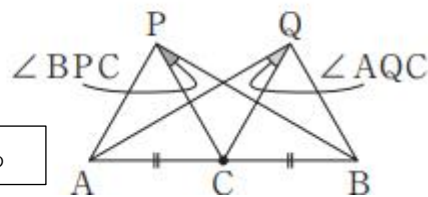
この問題は中学2年生で学習する「三角形や平行四辺形の基本的な性質などを具体的な場面で活用すること」の内容である。三角形の合同を示すことで $AQ = PB$ を導くことができる」と明らかにし、合同を示すために必要な関係を見いだすものである。

このような説明の記述の問題については無解答率が高いが、合同を証明するための根拠を見つけ、証明の筋道を立てることができない生徒が多くいたためであると考えられる。

< 2 の問題 >

- (2) 健太さんは、線分 AB の中点に点 C をとった場合に $\angle AQC$ と $\angle BPC$ が等しく見えたことから、他の場合にはどうなるか気になりました。

線分 AB の中点を M とする



- ◎ 点 C が点 A と中点 M の間にあるとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和は ① 。
- ◎ 点 C が中点 M と点 B の間にあるとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和は ② 。

- ア 60° より大きい
イ 60° より小さい
ウ 60° になる
エ 60° より大きいことも小さいこともある

この問題は中学校 2 年生で学習する「証明の必要性和意味及びその方法について理解すること」「三角形の合同条件などを基にして三角形や平行四辺形の基本的な性質を論理的に確かめたり、証明を読んで新たな性質を見いだしたりすること」の内容である。①②ともに正答はウであるが、前問にある合同の性質を適切に活用することができない生徒がいたと考えられる。

【まとめ】

図形の性質を考察する場面では、**観察や操作、実験などの活動を通して、成り立つと予想される事柄を見だし、その事柄が成り立つことを論理的に考察し表現できるようにするとともに、条件を変えても成り立つ事柄を見いだすなど統合的・発展的に考察できるように指導することが重要である。**学校質問紙では、「数学の授業において観察や操作、実験などの活動を通して、数量や図形等の性質を見いだす活動を行ったか」という質問項目に「よく行った」と回答した学校の本市の割合は低かった。学習用端末を活用するなど実際の操作等を行い、**生徒自身が表現できてよかった、納得できてよかったと思えるような授業展開のさらなる工夫**が必要である。

4 質問紙に関する調査結果

質問紙調査については、(1) 教育活動の取組状況に関わる項目について (2) 教育環境に関わる項目についての2点で整理をしていく。これらの項目についてできるだけ肯定的な回答をする児童生徒を増やしていくことが、学力の向上にもつながると考える。

(1) 教育活動の取組状況に関わる項目について

【項目1】「国語の授業内容がよく分かる」

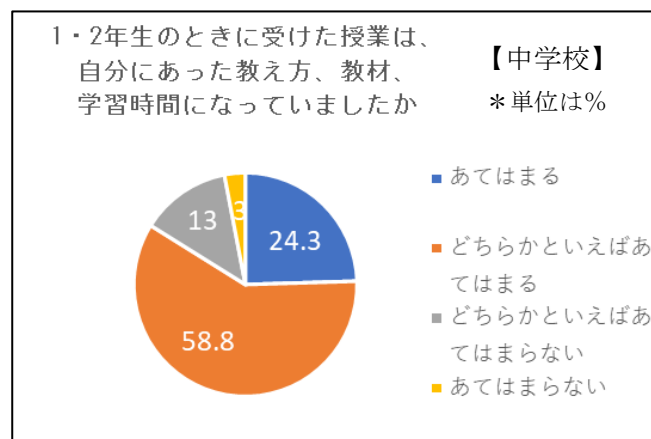
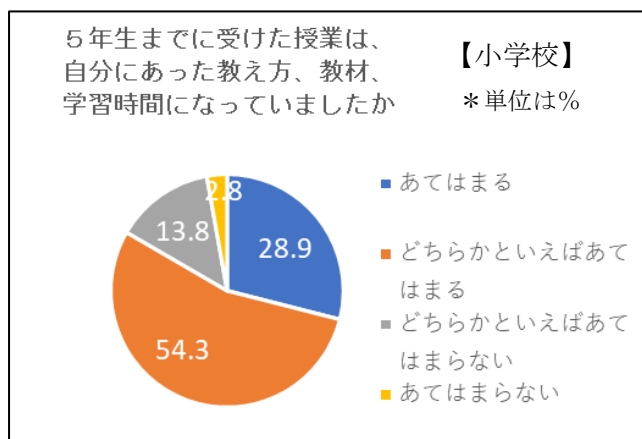
【項目2】「算数・数学の授業内容がよく分かる」

※小学校、中学校ともに「国語（算数・数学）の授業内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

		小田原市	全国
小学校	国語	84.9%	86.3%
	算数	81.3%	82.1%
中学校	国語	85.0%	82.7%
	数学	77.0%	75.7%



【項目3】「前の学年までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた」



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かったと回答した割合は、小田原市が令和3年度に設定した目標値（国語 90%、算数・数学 89%）に届いていない。児童生徒が、自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着につながっていく。理解の度合やスピードは一人ひとり異なるが、教え方、教材、学習時間の設定について、それぞれが最適であると感じられるように個に応じた指導をさらに工夫をしていく必要がある。

【項目 4】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

※小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答した児童生徒の割合

	小田原市	全国
小学校	80.2%	81.9%
中学校	78.7%	80.3%

課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。肯定的な回答をした児童生徒ほど各教科の平均正答率が高い傾向であることが明らかになっており、自分の考えをもち、主体的に課題に取り組むことは大変重要である。小学校と比べて中学校の回答率が低いことから、本市で進めている STEAM 教育のような、自ら課題を設定し解決に向けて取り組む活動が重要である。今後も、与えられた課題に取り組むだけではなく、**児童生徒一人ひとりが興味関心を高めて問いをもち、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めていくことが大切である。**

【項目 5】「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができている」

※「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができていますか」という質問事項に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合

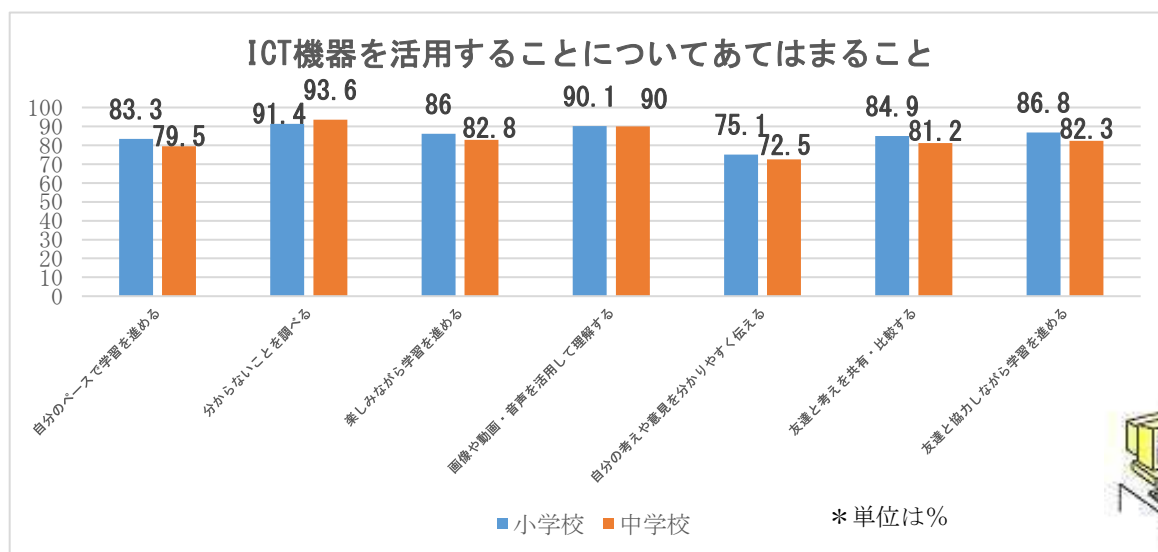
	小田原市	全国
小学校	86.1%	86.3%
中学校	85.2%	86.1%

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各学校で授業研究などの取組が行われているが、児童生徒自身も、学習活動の中で行う対話の良さを実感していると考えられる。**友達や他の生徒の思いや考えと出会うことによって、自分の考えが変わったり、新たなものを生み出したりといった経験をさらに積み重ねられるようにしていくことが望まれる。**そのためにも、温かく互いを認め合う学習集団の形成が不可欠である。



(2) 教育環境に関わる項目について

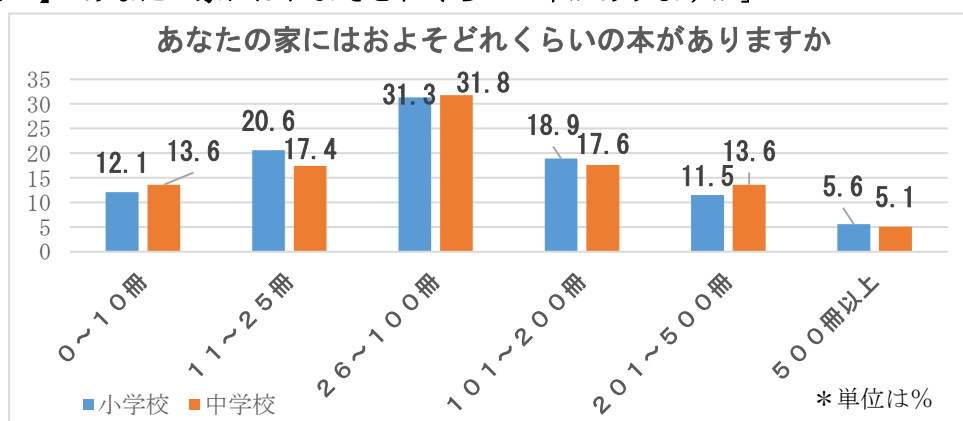
【項目1】「学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を活用することについて次のことにどれくらいあてはまりますか」



課題の解決に取り組む学習活動を行っている学校ほど、**考えをまとめ、発表・表現する場面で ICT を活用している傾向**が見られ、その両方に取り組んだ学校グループの児童生徒は、それ以外の学校グループに比べて、各教科の正答率が高いことが文部科学省の今年度のクロス集計で分かっている。また、**ICT 機器活用の効力感が高い児童生徒ほど、挑戦心・自己有用感・幸福感等が高い傾向**がある。

今後も課題の解決に取り組む学習活動や発表・表現する活動の中で、**学習の道具として ICT 機器を自由に活用できるような場面を指導計画の中に意識的に設定することが大切である。**

【項目2】「あなたの家にはおよそどれくらいの本がありますか」



日常的に本に親しむことは、様々な世界や考え方に触れることにつながる。さらに国語の調査結果から課題として見えた国語の読む力や表現の工夫などをはじめ、他教科も含めた学力の向上にもつながる。家庭の SES（社会経済的背景）により家にある本の冊数に大きな差があることを考慮し、**児童生徒が進んで本に親しめるよう、様々な読書環境を整えたり、声かけをしたりして工夫していくことが重要**である。